

ポップミュージックの教材化の意義と可能性

ドイツの音楽科教育を基に

教育学研究科 芸術教育専攻 音楽科教育学領域

杉浦麻莉子

今日、音楽は様々な機器の発展によって持ち運び可能となり、より身近なものになった。特にポップミュージックは世界中の多くの人々に日常的に聴かれており、いまや世界中での音楽ジャンルよりもポピュラーで、世界共通音楽としての地位を獲得していると言っても過言ではない。その一方で、日本では音楽科の授業内でポップミュージックが扱われることは非常に少なく、生活の中で耳にしたりカラオケで歌ったりする音楽と学校で習う音楽がかけ離れているのが現状である。筆者は授業でポップミュージックを扱うことにより子ども達が音楽科の授業をより親しみと関心を持って取り組めるようになると思う。実際ドイツではポップミュージックが小中学校で好んで用いられていて、児童生徒の反応も非常によいということが知られている。筆者が3年前に派遣留学で1年間滞在したドイツのフライブルク教育大学では、「授業で扱うポップミュージック」という講義が開講されており、児童生徒がバンドを組んで練習をしてみるという指導案をグループで作成したり、実際にそれらを基に学生を相手に模擬授業を行ったりしていた。それらを体験して、ポップミュージックを日本の音楽科の授業に導入することも可能なのではないかと考えた。

第1章では、ポップミュージックとは何かについて定義し、ポップミュージックの特徴と日本国内における2000年以降の年代別のポップミュージックの例を挙げた。第2章では文献を基に日本におけるポップミュージックの歴史と変遷をまとめ、現在の学校におけるポップミュージックの導入形態を示し、筆者が非常勤講師として勤めている小学校の3・4・6年生を対象とした音楽に関する意識調査の結果をまとめた。第3章では、ドイツにおけるポップミュージックの歴史とその変遷、有数のクラシック音楽作品や著名な作曲家を生み出したドイツでのポップミュージックとクラシック音楽の共存について述べた。また、留学中に知り合った、現在ドイツの中学校で教員として働いている友人のポップミュージックを用いた音楽科学習指導案や、現地で入手したポップミュージックの教材や授業への導入に関する書物などの情報を基に、ドイツの学校におけるポップミュージック導入の現状について記した。4章では、ドイツ国内で行われた授業実践例や指導案は日本への導入障壁があるのかについて言及し、文献を参考に日本におけるポップミュージックの教材化の意義を示し、日本の小中学校でも可能なポップミュージックに特化した指導計画を提案した。そのポップミュージックをバンド形態で学習する音楽科授業を受けた小学6年生の児童81名を対象にアンケートを実施し、そのような授業の導入によって子ども達が音楽科の授業をより生活に身近なものとして捉え、楽しく取り組めるようになるかを検討・

考察した。